

火山の現状の評価における評価文及び資料について

(令和7年7月2日 第5回火山調査委員会 資料 調5一(2))

○評価文の作成

- ・調査観測データや研究成果を総合的に分析して、現象の解釈やメカニズムの推定等を行うとともに、今後の火山活動の推移や噴火の切迫性、自然現象に係るハザード等を評価して、評価文として取りまとめる。
- ・現状、総合的な評価のための基礎資料について、並行して収集、整理していくことを踏まえ、当面評価文は可能な範囲で作成。

※評価文の構成（イメージ）

*調査観測結果

（地震活動、地殻変動、熱活動、噴出物調査結果 等）

*現象の解釈、メカニズムの推定

（マグマの関与の有無、噴火規模、様式 等）

*想定される火山活動の推移等

（想定される火山活動の推移について、噴火の切迫性や推定される自然現象に係るハザードを含めて評価）

等

(令和6年4月23日 第1回火山調査委員会 資料 調1一(5)) より抜粋

前年度（令和6年度）の火山調査委員会における111の活火山の現状の評価及び8つの火山の重点的な現状の評価の審議を踏まえて、現状の評価における評価文及び現状の評価の審議のために収集する資料については、以下のとおりとする。

1. 評価文

○111の活火山の現状の評価における評価文

- ・評価文案は、前年度取りまとめた111の活火山の現状の評価文をベースに、共同庶務（文部科学省、国土地理院、気象庁）が作成する。
- ・評価文の構成は、前年度取りまとめた評価文を踏まえて、可能な範囲で「活動履歴」「調査観測結果」「現象の解釈及びメカニズムの推定」「想定される火山活動の推移等」を項目毎に段落に分けて内容を記載し、評価文を取りまとめる。ただし、北方領土の火山や海底火山等では、いずれの項目も記載できる内容が限られており、「現象の解釈及びメカニズムの推定」が記載できる火山はごく一部であることに留意が必要。

- ・ 前年度、重点的に現状の評価を行い詳細な評価文を取りまとめた火山については、重点的な現状の評価による詳細な評価文の内容を可能な範囲で反映する。
- ・ 重点的に現状の評価を行った火山以外の火山についても、評価文中の活動履歴の充実を文部科学省で進める。(例文参照)
 - － 日本活火山総覧第4版(平成25年3月)を基に、有史以降の主な噴火の場所、規模、様式、ハザード、及び、過去の噴火における先駆現象を可能な範囲で反映
- ・ 評価文案は、委員会前に文部科学省から委員に意見照会する。

○ 重点的な現状の評価における評価文

- ・ 評価文案は、当該火山に詳しい委員もしくは専門家に取りまとめを依頼する。
- ・ 評価文の構成は、前年度取りまとめた評価文を踏まえて、「活動履歴」「調査観測結果」「現象の解釈及びメカニズムの推定」「想定される火山活動の推移等」を基本とし、必要に応じて「最近の噴火の事後評価」「長期間噴火が継続するメカニズム」等を加え、これらの項目名を明記した上で内容を記載し、より詳細に評価文を取りまとめる。
- ・ 評価文案は、委員会前に文部科学省から委員に意見照会する。

2. 現状の評価の審議のための資料

○ 111の活火山の現状の評価のための資料

- ・ 概括的な評価文とすることを踏まえて、主として関係行政機関や国立研究開発法人の資料を収集、整理する。
- ・ 関係行政機関や国立研究開発法人の資料に加え、共同庶務、委員が評価文の取りまとめに必要と考える資料については、文部科学省が意見を集約して委員長に諮り、委員長の判断により、文部科学省から大学等の当該機関に資料提出を依頼する。
- ・ 資料提出の依頼状況については、文部科学省から委員に適宜共有する。

○ 重点的な現状の評価の審議のための資料

- ・ 関係行政機関や国立研究開発法人の資料に加え、評価文案を取りまとめる委員もしくは専門家が詳細な評価に必要と考える大学等の調査観測結果や研究成果等の資料を文部科学省が収集、整理する。
- ・ 委員もしくは専門家が詳細な評価に必要と考える大学等の調査観測結果等の資料は、文部科学省が集約して委員長に諮り、委員長の判断により、文部科学省から大学等の当該機関に資料提出を依頼する。

(例) 111 の活火山の現状の評価における評価文 -活動履歴の充実-

○111 の活火山の現状の評価（令和6年9月25日 第3回火山調査委員会）における十勝岳の評価文

十勝岳

20世紀に3回のマグマ噴火が発生し、1926年の噴火では大規模な火山泥流が発生した。最新のマグマ噴火は1988年から1989年に62-2火口で発生し、2004年には同火口でごく小規模な水蒸気噴火が発生している。

GNSS観測により、2006年頃から2017年頃に浅部の膨張を示す地殻変動が観測されたが、2018年頃からわずかな収縮傾向に転じ、2021年夏頃以降は、明瞭な収縮が続いている。62-2火口、振り沢（ふりこざわ）噴気孔群の噴気活動は、2018年から2021年頃にかけて次第に活発化し、2010年頃から増減を繰り返していた62-2火口付近浅部及びその周辺の地震活動は、2022年以降、概ね低調となっている。
(略)

活動履歴



○日本活火山総覧第4版（平成25年3月）を基に、活動履歴を充実させた十勝岳の評価文例

十勝岳

20世紀に中央火口丘において3回のマグマ噴火が発生した。1926年の噴火では、中央火口丘の北西部が破壊され、熱い岩屑なだれが積雪を溶かして大規模な泥流が発生した。1962年には、中央火口丘南側から噴火が発生して62-2火口等の複数の火口を生じるとともに、多量の火山弾や火山灰が噴出して、知床、南千島方面まで降灰した。最新のマグマ噴火は1988年から1989年に62-2火口で小規模ながら繰り返し発生し、噴石、火砕サージ、小規模な火砕流及び泥流が生じた。2004年には62-2火口でごく小規模な水蒸気噴火が発生している。これらの噴火活動においては、噴火発生の数年前から地温上昇や火山ガス増加など噴気活動及び熱活動の活発化がみられ、数ヶ月前には地震活動が活発化、噴火直前には規模の大きな地震の発生などの地震活動の更なる活発化や、火口付近に亀裂を生じる等の地殻変動が進行したことがある。また、1988年から1989年にかけて発生した爆発的噴火の直前には、火口直下の膨張や低周波地震の増加がみられることもあった。

GNSS観測により、2006年頃から2017年頃に浅部の膨張を示す地殻変動が観測されたが、2018年頃からわずかな収縮傾向に転じ、2021年夏頃以降は、明瞭な収縮が続いている。62-2火口、振り沢（ふりこざわ）噴気孔群の噴気活動は、2018年から2021年頃にかけて次第に活発化し、2010年頃から増減を繰り返していた62-2火口付近浅部及びその周辺の地震活動は、2022年以降、概ね低調となっている。
(略)

有史以降の主な噴火

噴火の前兆現象

活動履歴